

聖書：ローマ 10：1～13

説教題：主の御名を呼び求める

日時：2016年2月14日（朝拝）

このローマ書の9～11章ではイスラエルの問題が取り扱われています。旧約時代、神の民としてずっと特別な導きを受けて来たイスラエル人。しかし新約時代に入っ
てついに約束のメシヤ・イエス様が遣わされると、彼らはこの方を信じない。そし
てキリスト教会に連なっていない。この状況をどう考えたら良いのかということ
です。まず9章では、この問題が「神の主権」という観点から述べられました。しか
しそれですべてが説明し尽くされたものではありません。そこには私たち人間の責任
もあるということが9章30節から語られ始めました。この手紙が書かれた当時、
なぜユダヤ人の多くが救いにあずかっていなかったのでしょうか。9章30節から
の部分でパウロが述べたことは、彼らが神の前における義を信仰によって追い求め
ず、行ないによるかのように追い求めたからでした。このユダヤ人の責任について、
この10章でより詳しく語られて行くのです。

まずパウロが述べていることは、同胞ユダヤ人への思いです。パウロはただ上か
ら彼らを断罪しているのではないのです。パウロは彼らの救いを心から願い求めて
います。前に見た9章1～3節では、もしできることなら、私が彼らの代わりに呪
われた者となることさえ願いたいと言っていました。その思いがここでも再び吐露
されています。パウロは彼らが熱心であることは認めます。自分もかつてはそう
でした。しかし大きな問題は、その熱心が知識に基づいていないということです。熱
心は良いことですが、正しい知識に基づいていないとかえって厄介。かえって危険。
とんでもない誤りに一生懸命になってしまう。一体彼らの誤りとは何だったの
でしょうか。それは3節にあるように、「神の義を知らず、自分自身の義を立てよう
とした」ことでした。「神の義」とは、これまでこの手紙に繰り返し出て来たように、
神が私たちにくださる義のことです。3章21～22節：「しかし、今は、律法とは別
に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。すなわち、
イエス・キリストを信じる信仰による神の義であって、それはすべての信じる人に
与えられ、何の差別もありません。」神は自分の力では義の状態に達し得ない私
たちのために、ずっと約束をして来られて、ついにキリストを与えてくださいまし

た。4節にその「キリストが律法を終わらせた」とあります。すなわちキリストが律法の要求をすべて成し遂げて、この道を通して救いに達するという方法を終わりとされた。自分の力で義を獲得することができない私たちは、ただこの方を信じ、この方にすがればいい。ところがユダヤ人はこの神の義に従わなかった。むしろ彼らはこの方につまずきました。イエス様を見て、あれが我々の救い主ではないと退けた。十字架にかけられた者が救い主なんかではない！と。それは彼らのプライドが許さないことでした。そして彼らは神の義に従うのではなく、自分自身の義を立てようとしたのです。

パウロもかつてはそうでした。彼は以前、自分が誇っていたことについて、ピリピ書3章5～6節でこう述べています。「私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるどころのない者です。」パウロはある意味で誰よりも先を走っていた人です。そんな彼に転機が訪れたのは、ダマスコ途上においてでした。彼はそこで栄光の状態にある復活の主に出会います。その時に、彼は世界を見る目が全く変わりました。その主の栄光の光の下では、自分が誇って来たものはすべてガラクタ同然に見えました。パウロは続く7節では「しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。」と言っています。次の8節では、それらを指して「ちりあくた」と言っています。これは排泄物や食卓の残り物、くずなどを表す言葉です。口語訳聖書では「ふんど」と訳されています。つまりパウロはキリストの光の前に立った時、自分がそれまで誇って来たものが生ごみのように見えたのです。生ごみをゴミの日に出すと、清掃車が持って行ってくれます。ありがたいお仕事ですが、そばを通る時、かなり厳しい匂いがします。私は週日に自転車に乗って教会に来る時、よく清掃車と会いますが、息を止めて急いで通り過ぎます。私たちはその生ごみのような義を神の前に持って行って、自分は胸を張れると勘違いしている。これはお話にならないことなのです。

でも、とある人は言うかもしれません。そうは言っても、素晴らしい行ないをしている人はこの世にたくさんいるのではないか。その人たちまでそのように言うのは少し言い過ぎではないか、と。確かにまだ信仰を持っていない人たちにも素晴ら

しいところがたくさんあります。神は人間を非常に良いものとして造られました。人間は罪を犯して墮落してしまいましたが、その後もなお「神のかたち」であると言われていて、神の輝きを映し出す側面が残っています。これはただ神のあわれみによることです。しかし一方で聖書は私たちのあらゆる部分には罪が浸透していて、その考え、思い、行動に影響を及ぼし、染み渡っていると言っています。たとえばここに純粋な水が入ったコップがあるとします。しかしもし、ここにどぶからスポイトで汲んで来た液体を一滴垂らしたら、果たしてこれを飲むでしょうか。決して飲まないでしょう。見た目には良く分からないと思います。一見純粋な水のようです。しかし事實は、どぶの汚い成分はコップの中のあらゆる部分に浸透・拡散している。私たちの義もそうです。しかも私たちの罪の染みは一滴二滴の話ではありません。いくら他の人と比べてまだ自分はましだと言っても、それは神の前に決して受け入れられるものではないのです。私たちがどぶの液体が一滴でも入った水を激しい嫌悪感を持って退けるように、神は罪が少しでも混じっている私たちの義は当然、激しい嫌悪感をもって退けるのです。イザヤ書 64 章 6 節：「私たちはみな、汚れた者のようになり、私たちの義はみな、不潔な着物のようです。」このような私たちなので、神はただ恵みによって私たちを救うための「神の義」を用意くださったのです。それをイエス・キリストにおいて備えてくださったのです。しかしユダヤ人はこの神の義に従わず、別の道を行こうとした。従ってそこに救いはないのです。いくら熱心にその道を進んでもかえって自分を救いから遠ざける結果となるだけなのです。

5 節以降には彼らの前に置かれている二つの道のことが改めて述べられています。その一つの道は 5 節にある通り、「律法による義の道」です。「律法による義を行なう人は、その義によって生きる。」しかし問題はこの律法による義を行なえるのかということです。ヤコブ書 2 章 10 節：「律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。」それに神は私たちの外側ばかりでなく、心の内側のすべてを見通しておられます。その神の前で義と認められることなど、私たちにどうしてあり得るでしょう。

もう一つの道は 6 節以降に記されている「信仰による義の道」です。6～7 節では再び、旧約聖書の言葉が下敷きになっていますが、少し意味が分かりづらいと思

います。パウロが言いたいポイントは8節に出て来ますので、そちらから見る方が分かりやすいと思います。彼がここで言いたいことは、みことばはあなたの近くにある！ということです。これを求めて遠くに出掛けて行く必要はない。これを押さえてもう一度6節を見ると、そこで言われていることは、この義を求めて天に上る必要はないということです。すでにイエス・キリストが天から下って来ました。そして私たちのそばに来られました。ですから私たちは自分が天へと上って行ってキリストを引き下げようようなことをする必要はない！7節も同じです。義を求めて地の奥底に下る必要もない。キリストはすでに復活されました。私たちのそばに来られました。だから私たちは自分で地の底へ下って行ってキリストを引き上げて来るようなことをする必要はない。つまり私たちがどこかに出かけて行く必要はなく、すでにキリストが私たちのところに来られて必要な義を全部備えてくださったのです。これは私たちの手の届くところ、私たちにその気があれば私たちの口に、あるいは心にあると言えるものなのです。だから私はこの神の義を知らなかったとか、これは私たちの手に入らないところにあるものだったと言い訳することはできない。それはあなたのすぐそばにもうあるのです。

そんな私たちに求められていることが9～10節にあります。それは「あなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださった」と信じることです。イエスを主と告白するとは、イエス様こそ私の救い主、私の従うべき方だとすることです。私のために天から下り、十字架にかかり、復活して、今やすべての上に上げられた主であると告白することです。もう一つの「神がイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じる」とはどういうことでしょうか。イエス様の復活は、イエス様が私たちのためにしてくださった救いのみわざが成功したことを保証するものです。イエス様は私たちの罪を背負って身代わりに十字架上でさばかれました。その方を神がよみがえらせたということは、このお方の上にあった私たちの罪が今や完全に処理されたということです。つまりイエス様を信じる者たちの罪は神の前で赦されたということです。このことを感謝して「心」で信じる。「心」は私たちの人格の中心的な座です。そしてその信仰は口を通して外に告白されなければなりません。内側と外側は一つです。この信仰告白をもって私たちはキリストにあって神の前で義と認められ、救いを頂くことができるのです。自分が何かをしたからではなく、ただ神の義により頼むだけで、神は

私たちを義と認め、ご自身との正しい関係に基づくあらゆる祝福に生かして下さるのです。

最後の 11～13 節は、この祝福は今やすべての人に差し出されているということです。11 節にあるように、「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」 12 節にあるように、ユダヤ人でもあってもギリシヤ人であっても区別はありません。主は今やすべての人の主であり、主を呼び求めるすべての人に恵み深くられます。13 節にあるように「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。私は主を呼び求めたのに、神に選ばれていないから救われないというようなことはない。主の御名を呼び求める者は、例外なく、だれでも救われるのです。救いはこのように提供されているのです。ここに私たちの責任がしっかりあるのです。

果たして私たちはどっちの道を行く者でしょうか。自分自身の義を立てようとする者でしょうか。それとも神の義に従う者でしょうか。自分の力では義を立てられない私たちのために、神はただ恵みによる「神の義」を備えてくださいました。これを退けたら、もう救いは他にありません。いくら熱心に別の道を進んでもダメです。それは自分を救いからいよいよ締め出すだけです。しかし神は自分を救えない私たちのために義のプレゼントをキリストにあって用意してくださいました。キリストはそのために天から来られ、復活して、私たちのすぐそばにその祝福を持って来てくださいました。それは受け入れるつもりがあるなら、もう私たちの口にあるもの、また心にあるものと言えるのです。私たちは神がキリストにおいて差し出しているこの神の義を感謝して見つめたいと思います。求められていることは、心に信じ、それを告白すること。神はそれだけで私たちを御前で義と認め、ご自身の豊かな祝福に生かしてくださいます。主の御名を呼ぶ者は誰でも救われるのです。